【書評】

小杉亮子 著『東大闘争の語り── 社会運動の戦略と予示』（2018 年、新曜社）

牧野 良成（大阪大学）

本書は、著者・小杉亮子が 2016 年 1 月に東北大学文学研究科に提出した博士論文「一九六〇年代学生運動の形成と展開――生活史にもとづく参加者の政治的志向性の分析」に、大幅な加筆・修正が施され、書籍化されたものである。小杉は本書刊行の翌年、同じく社会学領域の研究者とともに『社会運動史研究』（新曜社）を創刊するなど、戦後日本社会運動史をめぐる近年の研究動向のなかでも際立った研究者のひとりと言える。本書では、戦前以来日本の学生運動において思想的先端・人材的拠点としての位置を占めてきた東京大学が「一九六〇年代学生運動の性格や意義を検討するにあたってふさわしい」事例としてとりあげられ（34-35 ページ）、参加した「当事者の動機・問題意識と運動の論理にかんする内在的分析を行い、その歴史的意義を明らかにする」ことが課題とされる（17 ページ）。

本書は日本の“1968”研究の書として、すでに少なからぬ書評の対象となっている（塩川 2018, 山本 2019, 荒川 2019 など）。また、著者じしんによる行き届いた解説もある（小杉 2018）。とはいえ、本書が社会学における社会運動研究にいかなる貢献を成したかという観点からの論評は依然乏しい。事例の性格をめぐる論点や委細な内容紹介は先行する書評群に譲って、この書評では同書の社会学的貢献のありかの確認に注力したい。

本書の理論的土台は、1990 年代以降に確立された「社会運動と文化」研究[1]の系譜に求められている（第 2 章「社会運動の文化的アプローチと生活史分析」、および第 4 章「一九五〇-六〇年代の学生運動文化とその変容」）。この系譜は、 1980 年代までの社会学における社会運動研究（とりわけ、資源動員論に始まる「構造的アプローチ」）の閉塞状況、“新しい社会運動”論の登場、社会心理学的／認知的要因が注目を集める動き、そして社会科学領域全般における「文化的展開 cultural turn」を前段とする（野宮 2002）。これらの動向を受けて 1992 年にはトランスアトランティックな研究者の参加でワークショップが開催され、3 年後にはその成果として論集『社会運動と文化 Social Movements and Culture』（Johnston & Klandermans 1995）が刊行、後続の研究動向においても重要な

[1] 本文では「社会運動の文化的アプローチ」と表現され、また別の論者の用例では「社会運動の文化的研究」（野宮大志郎 2002）という表現もなされているが、ここでは当該研究動向の源流を明示するべく、富永京子（2016）の用例に倣った。

参照点のひとつとされるにいたった。じじつ、第 4 章において用いられる分析概念「社会運動コミュニティ social movement community」の典拠として示された論考の著者 Suzanne Staggenborg も、同書を参照している。

ここで言う「文化」とはいったいなにを指し示しているのか？ クリフォード・ギアーツをはじめとする人類学者の影響のもと、1970 年代から 80 年代にかけて進行した社会科学領域全般の「文化的転回」のなかで確立された「文化社会学 sociology of culture」の視角に倣えば、それは「意味構成・意味秩序にかかわる局面全般を意味する分析的な概念」である（佐藤成基 2010: 94）。ここからさらに社会運動研究の動向に視野を限定すると、分析概念としての「文化」は、①意味世界の多層性を把握するのに有用性を見出され、またそれゆえに②支配の根拠と反支配的思惟の根源として、かつ③新しい意味世界の創造を担い変動を進めるエージェンシーとして位置づけられてきた（野宮 2002: 13）。

以上の研究動向を念頭に置くならば、『東大闘争の語り』は、運動文化のなかでも、行動の背後にあるプロトコルとしての「運動原理」（21 ページ）を対象化することに力点を置いたしごとということになる。本書の特徴は、運動文化の空間的外延――すなわち、東大キャンパスという空間――に自覚的だという点であろう。この点は、先述の Staggenborg の議論を経由することで明確化されている。運動文化の研究は、一定の空間的外延を前提しなくては成り立ち得ない（さもないと、記述対象とされているのがどこのいかなる運動の文化なのかがあいまいになってしまう）。本書における「社会運動コミュニティ」という分析概念は、そのための補助線として用いられているのである。

『東大闘争の語り』は、その貢献をもっぱら東大闘争の歴史的遺産の解明という点に求めており、理論的貢献についてはさほど強調していない。評者は思い切って、本書の貢献は、社会運動の歴史社会学の方法論としてのオーラルヒストリーを、「社会運動と文化」研究の領域仮説とともに提示したという点に求められる、と主張してみたい。本書が生活史法を採用するにあたって参照した朴沙羅の議論を補助線として、以下詳述しよう。

朴がその記述の対象として念頭に置くのは、「ある出来事に関わる人々がかつて共有していた知識と当時の常識、お互いに相手を観察しあって何か成し遂げたときの理解や行為のやりとり」としての「社会」（朴 2017: 49）である。こうした意味での「社会」を分析対象として据えるべく、社会問題の構築主義的アプローチ、およびエスノメソドロジーにおける議論の蓄積を参照する。朴はこれらの議論から、①出来事の記述（としての資料）は、その出来事をめぐるなんらかの文脈のもとで残されたものである以上、出来事そのものから独立させて検討するのは不可能だということ、②出来事の記述（としての資料）は、その背景にかんする知識と日常的推論なしには成立し得ないこと、③あらゆる資料はなんらかの出来事の記述であって、そうである以上、「あらゆる文脈において『間違った』資

料なるものは存在しない」ことを確認する（朴 2017: 38-39）。以上を前提とすれば、ある資料が産み出された背景についての知識を充実させてゆくことは、その資料が記述の対象としている出来事についての理解をより適切にしてゆくことそのものであり、それを積み重ねてゆけば「過去の経験を成立させた条件」としての「社会」を解明できると考えられる（朴 2017: 56-57）。ここにこそ、問題にする事実と関連するものならば、聞き取りや観察の音声・写真・映像記録はもちろん多種多様なドキュメントなど、さまざまなかたちで産み出され残存した資料をできるかぎり収集し、分析にあてる固有の意義がある。

こうして小杉は、すでに博物館・文書館・図書館に収蔵された豊富な資料群はもちろん、聞き取り協力者から提供されたビラなどの一次資料、新聞や書籍などの二次資料のおかげで、大学キャンパスという空間において形成されていた運動文化に兆した変容を緻密に描くのに成功したのである。それはすなわち、運動実践を目的達成のための手段として位置づける「戦略的」な運動原理（具体的には、旧新左翼双方の党派主導的な活動スタイル）が覇権を失い、運動そのものが理想的な社会の予想図となるよう組み立てようとする「予示的」な運動原理（具体的には、後年“全共闘”と呼ばれるようになる、非党派活動家たちの活動スタイル）が発生していった過程である（411-412 ページ）。さしあたってはかつての行動についての語りに耳を傾け、あらゆる資料にあたりながらそれについての理解をより適切なものへと高めてゆくことで、同時代の運動文化の像があらわになってゆく――本書が提示した社会運動の歴史社会学の作業工程表は、このようなものではないだろうか。

ただし「運動原理」の対象化のされかたについては、評者には疑義がある。博士論文から継承されている、参加者の「志向」を概念化しようとする作業が、書籍版における運動原理をめぐる議論と齟齬をきたしているように思われるのである。「運動文化」というメゾ水準ないしは集合的-間主観的な次元と、「政治的志向性」というミクロ水準ないしは個人的-主観的な次元とが、書籍版における議論においては性急に結びつけられているのではないか。なるほど、「戦略」／「予示」という運動原理はある種の理念型として理解できるだろうし、個々人にはなんらかの政治的志向性が想定できるだろう。だが、一定の政治的志向性を持ちあわせているからといって、選択されるのがつねに片方の運動原理だとはかぎらない。運動原理の選択を理解するには、個々人の「志向」だけではなく、かれらが置かれた状況ないしは文脈をも考慮に入れるべきであって、複数の運動原理は個々人にとっては選択肢として現われるとみるべきではないだろうか。同じアクターであっても状況によって異なる運動原理を「志向」するばあいもあることは、小杉じしんも注意を促しているとおりだが（23 ページ）、本書における政治的志向性が二元的に概念化されてい

るのは否めないだろう[2]。

こうした齟齬がなぜ生じるかを考えるにあたっては、社会運動研究者の富永京子（2016）による「社会運動と文化」研究の批判的検討が示唆的である。組織現象としての社会運動の動員・持続・発展を説明しようとする「動員論的運動論」（富永 2016: 36-37）の問いと対象から独立し切れなかったがゆえに、「社会運動と文化」研究は運動の文化的次元を「運動の組織化に寄与する要素としてしか論じることができ」ず、結果として活動家を「『組織に従属するものとしての個人』としてしか扱い得なくなってしまっている」というのが、その要点である（富永 2016: 62）。富永の批判になぞらえるならば、本書において提示されているのは〈原理に従属するものとしての個人〉となってはいないか。

引用・参考文献

荒川章二，2019，「書評と紹介 小杉亮子著『東大闘争の語り』」『大原社会問題研究所雑誌』731・732: 88-93.

Johnston, H., & B. Klandermans, 1995, *Social Movements and Culture*, Minneapolis: University of Minnesota Press.

小杉亮子，2018，「否定的な集合的記憶を乗り越えるために――『東大闘争の語り――社会運動の戦略と予示』を上梓して」『季刊現代の理論』第 15 号（2018 年 9 月 28 日取得，http://gendainoriron.jp/vol.15/rostrum/ro05.php）.

野宮大志郎編著，2002，『社会運動と文化』ミネルヴァ書房.

朴沙羅，2017，『外国人をつくりだす――戦後日本における「密航」と入国管理制度の運用』ナカニシヤ出版.

佐藤成基，2010，「文化社会学の課題――社会の文化理論に向けて」『社会志林』56（4）: 93-126.

塩川伸明，2018，「『東大闘争の語り――社会運動の戦略と予示』を読む」（2018 年 7 月 17 日取得，http://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/notes2013-/KosugiRyoko.htm）.

[2] これとはまた別の問題もある。「戦略的」／「予示的」という理念型は、あくまでも 1960 年代社会運動のひとつである東大闘争を事例として導き出されたものである。このため、『東大闘争の語り』において概念化された運動原理の二元性は、当時の活動家たちの運動原理の二元的な把握をそのまま反映したものとみることができるだろう。そうである以上、東大闘争においてはあらわにはならなかった次元を想定する余地はある。外在的なコメントを記せば、『東大闘争の語り』における方法論は、当時の活動家たちが行動をつうじて定着させた認知的地平としての運動文化の分析的復元を課題としている以上、たとえばフィールドワークにおいてならなんらかのかたちで観察できるであろう、文化というかたちでは定着され得なかった臨場的な「行動の可能性」を見出すのが不可避的に困難である。

富永京子，2016,『社会運動のサブカルチャー化――G8 サミット抗議行動の経験分析』せりか書房.

山本崇紀，2019,「書評 小杉亮子著『東大闘争の語り』」大野光明・小杉亮子・松井隆志編著『社会運動史研究 1 運動史とは何か』新曜社，117-21.